2023.7.19

博物館 Dictionary No.231

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

展示中の作品について、研究員が分かりやすく解説します。

目の不自由な人のための神様

京都當道会所蔵の日吉山王曼荼羅図

日吉山王垂迹神曼荼羅図

日吉山王本地仏曼荼羅図

図１　日吉山王垂迹神曼荼羅　14 世紀　京都當道会蔵

図２　日吉山王本地仏曼荼羅　14 世紀　京都當道会蔵

これは、比叡山延暦寺の守り神である、坂本にある日吉大社の神様を仏の姿と神の姿で描いたものです。日本は、インドで生まれた仏教を中国を通じて新しく受け入れました。しかし、それ以前から日本には神々がおり、信仰を集めていました。日吉大社も、比叡山（「日枝」、「日吉」とも表記）にもとからいた神様です。仏教が日本に浸透していく過程で、神道を取り込もうとする動きが生じ、やがて、日本の神々は日本人に合わせて仏（本地仏）が仮の姿を現したもの（垂迹神）と考えられるようになりました。これを本地垂迹説といいます。

垂迹神曼荼羅は（図 1）、日吉大社に所属する二十一の神（二十一社）に加え、一番下の縁側に護因と赤山明神を加えた二十三社を表しています。日吉大社にお参りした人なら、境内に東西の本宮の他にたくさんの社があることをご存じだと思います。上七社、中七社、下七社の計二十一社はその主要な祭神です。

本地仏曼荼羅は（図２）、上七社の本地仏七体、中七社から三社の本地仏三体を縁側に描き加え、十宮神と呼ばれていました。

本地仏と垂迹神の曼荼羅が対になっているのですが、垂迹神は14世紀前半、本地仏は14世紀半ばのもので、もとはセットではなく、あとで取り合わされたものと考えられます。

この二幅は、江戸時代初めの菊桐文蒔絵箱に納められ、更にその箱は二重の木箱に厳重に納められていました。なぜここまで大切にされたのでしょうか。それは、この絵の伝来した京都當道会の歴史と関わります。

図3　日吉山王本地仏曼荼羅図（部分）　14世紀　京都當道会蔵

当道とは、中・近世を通じて受け継がれた目の不自由な人びとの組織の名前です。「耳なし芳一」のお話しをご存じですか？目の見えない芳一は『平家物語』を琵琶で弾き語る名手でしたが、平家の亡霊に魅入られ、命を失う代わりに耳を失ったというものです。この怪談の遠い背景に、鎌倉時代に目の不自由な人が『平家物語』を語る琵琶法師となり、その仕事の権利を守るために組合（座）を作ったという歴史があります。当道座とは、その流れを受け継ぐもので、室町・江戸幕府によって保護され、目の不自由な人の仕事と生活とを守っていました。

特に、江戸時代には、それをとりまとめる「総検校」が仕事を行う当道職屋敷が江戸と京都に置かれました。京都当道職屋敷がその後、京都當道会になりました。その守護神として崇められていたのがこの絵で、検校職の奥義を伝えるといった大切な儀式で使われていたとされています。

もともと、日吉大社の聖女社（現在の宇佐若宮）の祭神の本地仏は、如意輪観音とされ、琵琶法師の信仰を集めていました。本地仏曼荼羅の十神のうち一神は組み合わせがよく変わりますが、図２では聖女社が描かれていることから（図３）、この絵は当道の守護神として大切にされたのでしょう。

しかし、明治４年（1871）、盲官廃止令により、当道座は廃止されます。仕事を失った目の不自由な人の生活はどん底まで落ちてしまいます。この状況を見かねた古河太四郎らの努力によって、明治 11 年（1878）、日本で初めて京都府立の京都盲唖院が開設されました。目や耳の不自由な人に西洋の進んだ凸字や点字などの新しい教育法を採り入れていったのです。平成30年(2018年)には、京都府立盲学校と京都府立聾学校が所蔵する「京都盲唖院関係資料」3000点が、重要文化財に指定されました。

京都當道会は、現在は目の不自由な人のためだけの組織ではなく、先人が伝えた音楽文化を後世に伝える存在となっていますが、先人の苦労を忘れないため、残された資料の保存に力を尽くしています。この絵も、令和２～４年（2020～22年）に、京都府指定文化財として京都府の補助のほか、朝日新聞文化財団・川合京都仏教美術財団の助成を受け、修理が行われました。

この絵を通して、皆さんも、社会福祉のあり方を考えてみてはいかがでしょうか。

（教育室　大原嘉豊）